OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	20世紀初頭の英国のファッションにおけるジャポニスム
Author(s)	サワシュ, 晃子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69695
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　サワシュ晃子　　）	
論文題名	20世紀初頭の英国のファッションにおけるジャポニスム

論文内容の要旨

第1章では、きものの特徴がどのように英国のファッションに取り入れられていったのか、そしてその際、きものをめぐってどのような言説が展開されたのかを、同時代の女性雑誌の記事と広告を用いて分析した。これまで、英国のファッションにおけるきものの特徴は、19世紀末の室内着と仮装用の衣装に見られるとされてきたが、西欧のファッションが大きく転換する20世紀に入ると、外出着にもその影響が顕著に見られることがわかった。きものの特徴は、第一次世界大戦の直前まで、4つの段階を追って取り込まれていく。当初はきものの柄などをモチーフとして採用するという表層的な影響にとどまったが、次第にきものの袖や襟など一部の形状を模倣し、ついで全体的な形状を模倣するという順に展開した。さらにそのことによって、きものの平面裁断方式を取り入れるなど、西欧の衣服の構成原理を変化させる、本質的な影響を与えるに至った。このような受容の段階は、ジャポニスムにおける日本美術の受容の段階と一致するものである。また、20世紀に入ってすぐより、キモノがファッショナブルな衣装であるとする言説が語られ始める。このように、キモノが新たなファッションの一つと捉えられるようになったことは、これまで私的な場での使用に限られていたきものを、外出着として着用するようになったこと、つまり、公の場で日常着として着用するようになったことにも現れている。このような言説の流布が、キモノ・ブームを一層加速させる原因の一つとなったと考えられる。一方で、英国のキモノ風ファッションのデザインの多くは、パリのデザイナーの作品をコピーしたものであり、英国独自のものではないことがほとんどであった。しかしながら、英国では百貨店がそれを安価で販売したことによって、デザイナーの作品を買う余裕のない層にまで広く普及したという側面があり、キモノ風ファッションの大衆レベルへの普及といった意味では、英国では結果としてフランスよりも大規模な影響が見られたと考えられる。

第2章では、20世紀初頭に、海外市場向けに日本国内で製作され、英国で室内着として普及した輸出用キモノに着目して、それらの英国における流通・消費の実態を探るとともに、英国の需要に合わせるためにそれらがどのように変化したのかを検討した。19世紀後半、ジャポニスムの流行を背景として、日本製の美術工芸品は西欧で大きな人気を博していた。とりわけ、当時の日本の最大の貿易相手国であった英国には大量の品物が渡っており、その中にはきものも含まれた。東洋美術専門店が販売したそれらのきものは、主に唯美主義の芸術家など一部の日本美術愛好家たちが購入する、異国趣味の品物であった。しかし、20世紀に入る頃になると、きものを海外市場に合わせて特別にデザインし直した輸出用キモノが登場する。第一次世界大戦前まで、それらの主要な輸出先となったのは英国であり、特に1900年代後半から1910年代前半にかけて、大量に英国に渡った。そしてそれらは、東洋美術専門店のみならず、この頃、英国の消費システムにおいて中心的な存在となっていた百貨店でも取り扱われるようになり、店頭販売と通信販売の両方を通じて、英国内に広く普及する。その購買層となったのは、新興の富裕層として台頭し、百貨店の主な顧客対象とされた、ミドル・クラスの女性たちであった。このように、その消費の主体が、日本美術愛好家からミドル・クラスの女性たちへと転換したことによって、輸出用キモノの流行は大衆レベルにまで広がった。そして、英国に輸出用キモノを供給し、この流行を支えたのが、高島屋をはじめとする日本の老舗呉服商たちの存在である。中でも、高島屋が製作した輸出用キモノは、居留地の商館に対する卸売や外国人旅行客への小売、あるいはカタログを用いた通信販売を通じて海外へもたらされただけでなく、英国に関しては、ロンドンに出張所を設けた直輸出貿易によって現地に渡った。また、この流通・消費の過程で、輸出用キモノの色は英国側の需要を反映した淡い色へと変更が行われた。英国でこういった色が求められたのは、当時のファッションの流行色が淡い色であったことに加えて、輸出用キモノの室内着としての用途を考慮すると、ヴィクトリア朝の頃に比べ、淡い色で明るく設えるようになったエドワード朝の室内装飾と調和させるためであったと考えられる。英国における輸出用キモノの流行は、流通・消費といった点に着目すると、そこに商機を見出した日本の業者と、それらを広く販売した英国の業者の相互交渉によって、戦略的に展開された現象であったことがわかる。

第3章では、当時の英国の社会において、キモノとそれを着る女性がどのようなイメージを持たれていたのかということを、大衆小説における描写を通して考察した。19世紀後半の英国において、きものは日本美術愛好家を魅了する異国の民族衣装であり、きもの姿の女性と言えば、ジャポニスム小説に登場するような、献身的で従順な日本人女性を指した。そして、『ムスメ』に登場するきものとそれを着る日本人妻の描写が明らかにするように、きものは西洋に対して下位にある東洋の象徴であり、彼女が西欧社会の一員となるためには捨てなければならないとされるものであった。しかし、20世紀に入り、海外市場向けにデザインされた輸出用キモノが流行し、広く大衆レベルにまで浸透したことによって、英国社会におけるきものの意味は大きく転換する。「ピンク・キモノ」に登場するキモノが、すでに異国趣味の品ではなく、日本という文化的、歴史的背景が完全に取り払われた、英国社会における富と階級の象徴となっていたことは、20世紀における新たなキモノのイメージを端的に表している。さらに、「レディ・ムーン」に登場した廉価版のキモノも同様に、日本という文脈を離れ、英国のロウワー・ミドル・クラスのスティグマとして機能していた。一方で、そのキモノを着る女性像は、1920年代のメディアを代表する存在であるモダン・ガールの西洋人として表象された。このことは、20世紀の英国社会においてキモノが持っていた、モダニズム的なイメージを示すものでもある。このようなキモノのイメージの変化は、ジャポニスムからモダニズムへの移行という図式に当てはまるものでもある。20世紀のキモノ・ブームによって、〈kimono〉は未開の東洋の象徴から、英国の富と階級の象徴へ、そしてそれを着る女性は、従順な日本人女性から、自己主張する西洋人女性へと変化したと考えられる。

第4章では、アッパー・クラスがキモノ・ブームにどのように反応したのかを明らかにするため、英国人デザイナー、ルシルの作品におけるキモノ風ファッションのデザインについて検証した。デザイナーにおけるきものの影響はこれまで、主にフランスを中心に検証されてきており、英国のデザイナーにおける影響はほとんど取り上げられてこなかった。しかしながら、英国人として初めて世界的な成功を収めた英国人女性デザイナー、ルシルの作品には、非常に多くのキモノ風ファッションが存在することが明らかになった。その影響源についてはっきりとは語られていないものの、劇場に深い関心を持つルシルが重要な着想源の一つとしていた舞台衣装や女優たちとの関係が作用していたのではないかということが推測される。19世紀末から20世紀初頭にかけて、英国でも数多く上演されたジャポニスム演劇の衣装も、劇場というメディアを通して、間接的にルシルに影響を及ぼしていたと考えられる。また、キモノ・ブームはミドル・クラスを中心として起こったと述べてきたが、アッパー・クラスを主な顧客とする高級ドレスメーカーであったルシルの作品に大量のキモノ風ファッションがあったことは、ファッションにおけるジャポニスムが、英国のアッパー・クラスの間にまで広がっていたということを示すものである。

一連の考察を通して明らかになったことは、まず、キモノ・ブームにおける英国の優位性である。複数の同時代資料が示したように、20世紀初頭にキモノが流行している場所として報告されたのは、パリではなく、ロンドンであった。それを裏付けるのが、日本から英国への輸出用キモノの輸出量の大きさである。これまでの研究では、ファッションの流行の発信地であるフランスが考察の中心とされてきたことにより、英国における流行についてはフランスの副次的な影響といった程度の認識にとどまってきた。また、きものが当時のデザイナーたちの創作の着想源となったとするデザイナー史観を基本とし、オリエンタリズム的な解釈に偏りがちになっていることで、輸出用キモノの流通に関わった日本と英国の業者の存在と、その間にあった、輸出用キモノの嗜好性を高めるための双方向の努力は見過ごされてきた。しかしながら、20世紀初頭のキモノ・ブームとは、決して一方的な摂取の文脈のみで説明できる現象ではない。また、当時、実際にデザイナーの作品を購入できるような層は限られていたのであり、むしろミドル・クラスに手の届くような輸出用キモノや、パリのキモノ風ファッションの安価なレプリカが大量に流通し、大衆がその消費の主体となったことがキモノを広く普及させ、大きな流行現象を引き起こしたのだと言える。確かに、キモノがファッショナブルであるという言説にはパリの権威を利用したし、キモノ風ファッションのデザインという点に関してもパリの多大な影響下にあったものの、一般社会における実際の浸透の度合いといった意味において、キモノ・ブームの中心が英国であったことは疑い得ない。

そして、次に明らかになったのが、19世紀の異国趣味的なきもの受容のあり方から、日本という文化的、歴史的背景が切り離され、キモノがファッションとして女性消費者を魅了したという、20世紀のキモノ受容の特徴である。20世紀に入った頃から、キモノはファッショナブルな衣装であるという言説がミドル・クラスの女性たちに向けて女性雑誌で語られ始め、その流れの中で、日本の民族衣装であったきものは、異国の香りを脱臭され、英国の日常着として取り込まれていった。そして、キモノは、富と階級というハイ・クラスなイメージと同時に、モダン・ガールと関連付けられたモダニズム的なイメージを併せ持つようになった。こうした変化はまた、ジャポニスムからモダニズムへの移行という図式にちょうど当てはまるものでもある。こうしたイメージの転換が、消費の主体となった女性たちにキモノをファッショナブルで魅力的なものとして認識させ、流行のさらなる拡大を後押ししたという可能性は高い。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　サワシュ晃子　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　准教授　橋本順光 副 査　大阪大学　教授　清水康次 副 査　大阪大学　教授　北村卓 副査　愛知学院大学　教授　岩田和男	

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：

学位申請者

論文審査担当者

主査　大阪大学准教授　橋本順光

副査　大阪大学教授　清水康次

副査　大阪大学教授　北村卓

副査　愛知学院大学教授　岩田和男

【論文内容の要旨】

本論文は、日本の女性用民族衣装である着物が 19 世紀末から 1920 年頃までの英国でどのように受容されたのか、文献資料と服飾資料を用いて、ジャポニスム現象と日本側の関与とを明らかにした論文である。

序論では、コルセットからの解放など、着物が 20 世紀西欧のファッションに与えた多大な影響について先行研究を概括し、それらがおおむねフランスのデザイナー史観中心主義であり、日本側の対応や輸出が考慮されていない問題点を明らかにしている。次に、ジャポニスム研究の成果を利用しながら、20 世紀初頭、日本の最大の貿易相手国であった英国には、日本の輸出工芸品が多く流通しており、そのなかには英国人向け着物（以下、論文での呼称に従って「キモノ」と表記）が含まれていたことを指摘している。

第一章「20 世紀初頭の英国におけるキモノ風ファッションの流行」では、序論の作業に基づき、英国におけるキモノの重要性を確認したうえで、日本の着物の受容と言説を分析している。ファッション雑誌の図像と言説に加え、英国の博物館などが収蔵する服飾資料を発掘することで、絵柄のような表面的模倣から、1907 年から 1914 年にはキモノ風のゆったりとしたコートが生まれ、さらには引きずるように裾を長くすることで、着物のシルエットを模倣したドレスまで流行したことを明らかにしている。たしかにそれらのキモノ風ファッションは、パリのデザイナーによる作品をコピーしたものが多かったが、百貨店で安価に販売されたことにより、広くミドルクラスに普及したことが強調される。

第二章「輸出用キモノの流行と日英貿易」は、こうした英国での流行を背景に、日本側が輸出用に製作したキモノとその消費を扱う。20 世紀の初めから 1910 年代前半にかけて、日本美術の愛好家がミドルクラスの女性へと拡大した現象と軌を一にして、輸出用キモノもまた彼女たちが消費したことに注意が喚起される。商機として注目した高島屋などの老舗呉服商によって、通信販売とともに英国内の店舗で直接販売されていたことが実際の商品の発掘とともに明らかにされる。その結果、絵画などで描かれるキモノが濃い色なのに比して、当時の流行色や室内装飾との調和から、輸出用キモノはむしろ淡い色であったことが推定されている。

第三章「英国におけるキモノとキモノを着用する女性のイメージ」では、キモノが珍奇な非日常の対象から、

ミドルクラスのファッショナブルな商品として変貌した過程を、キモノが登場する小説の分析から検証を行っている。『ムスメ』(1901)では日本人妻がリスペクタブルな女性になるために脱ぎ去るべき日本を象徴する存在だった着物が土着化し、「レディ・ムーン」(1919)や「ピンク・キモノ」(1920)では、英国社会の階級上昇の悲喜劇をひきおこす小道具にまで変容したことを指摘している。

第四章「英国人デザイナー、ルシルにおけるキモノ風ファッションと舞台衣装」では、英国人として初めて世界的な成功をおさめたデザイナーであるルシルという女性が、キモノ風ファッションを数多く制作していた事実に注目する。ルシルの服は 19 世紀後半の改良服運動を背景にして、第一次世界大戦前夜、アッパークラス向けの高級ドレスとして消費されたことを指摘し、着想源として同時代の日本を舞台にした演劇での舞台衣装を推定している。

結論では、英国におけるキモノの流行と消費は、ミドルクラスを対象に商品を改良した日英の業者により、フランスよりも盛んであったことが改めて確認される。そうした広範囲な受容とともに、着物の平面裁断方式という、西欧の衣服とは異なる構成原理の応用まで見られたことを挙げ、英国のキモノ受容が深層にまでおよんでいたことを強調している。

【論文審査の結果の要旨】

英国におけるキモノの流行については、フランスの事例研究の補遺か、断片的な言及にとどまるという現状のなか、19 世紀末の表象や言説から 1910 年代におけるキモノ風ファッションの実態と消費までを跡付けた本研究の意義は大きい。脚注を含めた本文は 148 ページ（豊富な図版や写真を除いた字数は 400 字換算で約 350 枚）あり、それに 10 ページの参考文献表、7 ページに及ぶ輸出用キモノの詳細を記した英国の所蔵機関表、8 ページの「ピンク・キモノ」の全訳が続き、これまでほとんど不明瞭であった英国のキモノについて、大まかな見取り図を明らかにした功績は高く評価された。

エキゾティックな表象から、異国風味が脱臭化されることでモダンな存在へと変貌していった過程も、日英の業者の関与、豊富な図像と言説、貿易収支などから説得力をもって解き明かされている。本論文の一部がすでに 3 本の査読付き学会誌に掲載されていることも、こうした実証面での貢献が確かなものであることを裏付けるだろう。

一方、こうした輸出用キモノの発掘に比して、それらを日英の先行研究の文脈で十分に分析しきれなかった点は指摘しなければならない。複数の注の不備にみられるように、なかには二次文献に言及しないまま、そこで引用される一次文献の解釈を踏襲した、いわば孫引きと受け取られかねない箇所まで見られた。本論文の知見は、20 世紀に顕著になった日英の経済衝突と日英同盟の解消、女権拡大運動と「東洋」の関係、ヴェブレンやジンメルが指摘した消費と流行の現代化、写真図版の技術刷新などに関する昨今の研究を、補完ないし更新する萌芽を多く含むだけに、先行研究の不十分な参照は極めて惜しまれる。

しかし、これらの指摘は、むしろ本研究の重要性と可能性に関わるものであり、今後、本論文を増補した成果が書かれることに、審査員一同一致して高い期待が寄せられた。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。